浄土宗新聞
Honen Buddhism
令和４年 2022 No.662 4
Jodo Shu Buddhist Denomination https://jodo.or.jp/
法主人 浄土宗 開宗850年 法然上人800年大遠忌 令和6年
発行＝浄土宗 ／ 編集＝浄土宗出版
東京都港区芝公園4-7-4　明照会館3階
TEL 03(3436)3700
お申し込みは12面をご覧ください

お釈迦さまの生誕を祝って 花まつり

4月8日は、仏教を開かれたお釈迦さまの生誕を祝う「花まつり」――。お寺やその幼稚園や保育園で、花で飾った小さなお堂に、生まれた時のお釈迦さまの像をお祀りし、子どもたちが甘茶をかける光景を見たことがあるという方も多いでしょう。今号では、この花まつりについてお話しします。

イラスト・遠藤由貴子

飛鳥時代から続く仏教行事

灌仏や　皺手あはする　数珠の音

これは江戸期の俳人・松尾芭蕉が読んだ一句。お年寄りの方なのでしょうか、お釈迦さまに想いを寄せ、祀られるお像に向かって手を合わせる情景が浮かんでくるようです。

お釈迦さまの生誕を祝う行事「花まつり」は、灌仏会、仏生会、浴仏会などとも呼ばれ、宗派を問わず全国的に寺院やその幼稚園、保育園などで営まれています。じつは、日本で最も古い仏教行事の一つともいわれ、『日本書紀』には、推古天皇14年（606）に、奈良の元興寺で行われた記録が残っており、花まつりにまつわるさまざまな言葉が俳句の季語として用いられていることから、古来、日本人にとってなじみ深い行事であったことがうかがえます。

灌仏会の名前は、仏さま（お釈迦さま）の像に甘茶を灌ぐことに由来するとされ、これはその生誕の状況になぞらえたものだといわれます。

お釈迦さまは、今から約2600年前にインドとネパールの国境付近にあったカピラという小国を治める釈迦族の王子として生誕しました。

生母であるマーヤー夫人は、白い象が自分の胎内に入る夢を見て懐妊したとされます。夫人は出産のために里帰りをする途中、現在のネパール南部に位置するルンビニーの花園で休息をとります。そこで花を咲かせていたアソーカ樹の枝を折ろうと右手を伸ばした瞬間に産気付き、右脇からお釈迦さまを生んだとされます。生まれたばかりのお釈迦さまは、四方に7歩ずつ歩き、右手で天を、左手で地を指し、「天上天下唯我独尊」と宣言し、伝承では、誕生の瞬間、竜が清らかな水（甘露水）を注いで、祝福したとされます。

花まつりでは、ルンビニーの花園を花で飾ったお堂に見立て、竜が注いだ甘露水を、甘茶を灌ぐことで表現しているのです。

現代の私たちからすると、生誕のお話は、にわかに信じがたいものですが、これはお釈迦さまのさまざまの性質を表したものとされます。

生誕の物語が意味するもの

当時のインドには、人々を四つの階級に分ける制度があり、それぞれの階級は原人（宇宙の根源的存在）の身体の各所から生まれたとされ、王族・武士は、脇から生まれたとします。これに「右は浄、左は不浄」とするインドの習俗が組み合わさって、お釈迦さまが王族であることを象徴的に表すために、「右脇から生まれた」という表現になったと考えられています。

また「七歩歩いた」というのは、私たち人間の世界を含めた悩みや苦しみを抱えながら生まれ変わり、死に変わりを繰り返す六つの世界「六道」を超越した存在であることを表しているといわれます。

そして、「天上天下唯我独尊」というフレーズ。一度は耳にしたことがあるという人も多いこの言葉は、「この世で私たち一人ひとりより尊いものはいないという」と、あらゆる「いのち」それぞれが大切であることを表したものともされますが、また別の意味があるとも考えられています。

お釈迦さまの生誕の様子を描いた典籍のいくつかには、この言葉の前後に、「私はこの一生を通じて仏となり、迷い苦しむあらゆる命を救い導く」との意味のことを述べられた、と記されています。

このことから、「天上天下唯我独尊」は、「あらゆる命を救う、仏というもっとも尊い存在となる」ことを宣言しているともいえるのです。

お釈迦さまは、その後さまざまな苦難に出会いながらも35歳でさとりを開き、80歳でお亡くなりになるまで、宣言されたとおり、多くの人を救い導かれました。その教えは、お経としてまとめられ、時代や国を超えて広く伝わり、現代の私たちにも感銘を与え続けています。

花まつりの日には、お釈迦さまの生誕を祝うとともに、「すべての命を救おう」と誓い、生涯をかけてその誓いを果たされたお釈迦さまへの感謝の想いを改めて持ちたいものですね。

生誕の地を表す“印石”

お釈迦さま生誕の地ルンビニーは、仏教の聖地の一つに数えられるだけでなく、ユネスコの世界文化遺産にも登録されています。

この地には、マーヤー堂というお堂があり、1992年から行われた調査で、その下から長さ70センチ、幅40センチ、厚さ10センチほどの石板が発見されました（**下写真**）。お堂の中心部に固定されていたことから、この場所が、お釈迦さまの生誕地であると示すために設置された印石ではないかとされています。

現在は遺跡保護のために周囲は建物で覆われ（**写真上**）、その中で石板を見ることができます。